バカと軍事オタクと召喚獣

アゲハ蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと軍事オタクと召喚獣

【Ｎコード】

Ｎ１５８８Ｚ

【作者名】

アゲハ蝶

【あらすじ】

この物語は明久Ａクラスです。Ｆクラスがめちゃくちゃ空気になってます。それと中坊が書いています。それが嫌な方は読まないことをおすすめします。多分不定期更新です。

オリキャラ設定1（前書き）

この物語は、作者の趣味全開で書いています。それが嫌な方、またはついていける気がしない、という方はブラウザボタンの戻るをクリック。ですが一応説明は書くつもりです。

オリキャラ設定１

設定

・石井拓馬（いしいたくま）
１７３ｃｍ　中肉中背
趣味：ゲーム（ＦＰＳ，レースゲーム）
２つ名：現代に蘇った山本五十六
好きなもの：銃，戦闘機，軍艦（第二次大戦の時の物），甘いもの
嫌いなもの：虫，辛いもの，苦いもの
得意科目：日本史、世界史、国語（４３０～６２０点）
苦手科目：保健体育、古典、英語Ｗ（１５０～２２０点）

・本作品の主人公。木下家や明久とは幼馴染みで、料理が出来るが明久には負ける。
姫路の料理を食べても少し手足に力が入らなくなるぐらいで済むくらい体が丈夫。
性格は優しいが一度戦闘が始まると優子や秀吉たちが止めない限り戦闘狂になる。基本は怒らないが明久たちが傷つけられると一気に凶暴になる。成績はＡクラス上位に入る程で、教えるのも上手く、その実力は明久と秀吉をＡクラスに入れる程。銃（エアガン）を持ってきていて、それを使用した時の実力はＦＦＦ団を１０分で制圧出来る程だが、武器がないと秀吉にすら負ける。知略に富んでおりその実力は雄二と互角。

・召喚獣
姿は第二次大戦の時の日本海軍と一緒
武器：Ｍ１ガーランド、Ｍ１Ａ１トンプソンの内のどちらか１つと無反動砲１つ
ガーランド、トンプソン：リロード一回につき二点消費、無反動砲

一回につき１０点

腕輪（一対一の時は使用不可）：航空支援・・・五分に一回使用可
点数の半分を消費。最高でも単教科で２００点、総合科目で２６００点まで消費する。機銃掃射・・・一回につき１００点分の攻撃力がある。全部で五回出来る。爆撃・・・一回だけ出来る。５００点分の威力と半径２ｍの加害範囲がある。

機甲師団・・・二分に一回使用可。点数の約三分の一を消費する。一台につき十発、全部で五台出現、一発につき十点分の威力と半径７５ｃｍの加害範囲がある。

艦砲射撃・・・十点だけ残して他の点数をすべて消費する。一発につき４５０点分　の威力と半径５ｍの加害範囲がある。一回につき８～１２発、三回撃つことが出来る。射程が新校舎の端から旧校舎の端まであるが水のそばでないと使えない。（トイレや水道など）

オリキャラ設定１（後書き）

主人公が若干チートな気もするが気にしたら負けだと思っている。

質問：みなさんの一番好きな授業といえば？作者は社会（歴史）が好きです。

こんな小説で大丈夫か？や一番いい小説を頼む。とか、そういう意見やダメ出しをしてもらえるとうれしいです。

第一問（前書き）

バカテストは基本しません。

第一問

オレらがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。
今オレらの頭は今年一年を共に戦い抜いていく戦友と教室…まあ要するに新しいクラスのことで一杯になっていた。

「吉井、木下、石井、遅刻だぞ」
玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。
この声は、まさかッ！スネー…もとい、鉄人ではないか！
「西村先生おはようございます」
「西村先生おはようなのじゃ」
「鉄じ…西村先生おはようございます」
「スネ…鉄人おはようございます」
「木下、おはよう。それと石井と吉井、今鉄人と呼ばなかったか？」
ちっバレたか。ならここは「ははっ気のせいですよ」これでどうだ！
「えっ違うんですか？」
「吉井ですら知っていることも知らんのか！？」
うん、やっぱ人をいじるのは面白いな。「ジョーダンですよ」
「まあいい。四人とも他に言う事はないのか？」
「西村先生遅れてすみません」
「西村先生遅れてすまぬのじゃ」
「「今日も肌が黒いですね」」
「お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか」ぬぬ、違うとな？ならば何だというのだ
「そっちでしたか、すみません」
「そっちか」
「まあいい。ほら、振り分け試験の結果だ」
「「「「ありがとうございます（なのじゃ）」」」」
「ところで吉井に木下弟、どうしたんだ一体？」

「「何かあったんですか？（あったのかの？）」」
「俺は五回も答案を見直したが間違いはどこにもなかった。二人ともまさかカンニングでもしたのか？」「そんな事しませんよ。という事は…」
「ああ、二人ともＡクラス入りだ。おめでとう」
「本当ですか？」
「疑うならこの封筒の中を見てみろ」といって渡された封筒の中に入っていた紙を見るとそこにはでかでかとこう書かれていた。

「石井拓馬、Ａクラス」「木下優子、Ａクラス」「木下秀吉、Ａクラス」「吉井明久、Ａクラス」
四人の幼馴染みの最高クラスでの生活が今幕を開けた。

第二問（前書き）

評価とお気に入り登録ありがとうございます。

第二問

Aクラスの扉を開けてみるとそこにはまるで高級ホテルの様だった。

「高級リクライニングシートに個人パソコン。ちょっとやりすぎじゃない？」

「僕もそう思うよ。なんで一人一人に個人冷蔵庫があるのさ」「ワシもこれはちょっと…」

「でもなんでここまでする必要があるのかな」

「たぶん、この設備目当てに勉強する奴狙いだろう。まあ、このクラスにこうして四人で来れたからもう勉強する気はないけどな」「そんな事言ってないでちゃんとしなさい」

まあ本当は試召戦争をしたかったがAクラスでは無いだろうし、せいぜいこのメンツでの学校生活を楽しむとするかね。

「みんな席が離れちゃうけどまあしょうがないか」「そうね、でも同じクラスなだけましじゃない？最悪あなたとウチの愚弟はFクラス行きだったかもしれないし」

「まあそう言ってやるなや優子。秀吉だって好きな演劇には俺たちですら負ける程夢中になれるし、明久だっていざという時の集中力と行動力は目を見張る物があるぞ」

「そう言ってくれて嬉しいのじゃ」「よしてよ拓馬。照れるよ」

「まあ俺にも誇れる物があると思いたいがな」そう言って俺は大型

のボストンバッグからとあるライフルを取り出す。あ、言っておくがエアガンだからな。

「またそんな物持ってきて。アンタよく懲りないよね。何回没収されてるのよ」「ていうか、ここはＡクラスだし、あいつらが襲ってくる心配はないと思うけど」

ふん、やっぱり明久は甘いな。「それでも備えあれば憂いなしと言うだろう。それに銃は俺のアイデンティティを構成するものなんだよ。これが無かったら俺は俺じゃない」

そういって俺は銃の整備に没頭する。ちなみに俺の好きな銃はＭ１ガーランドだ。今整備しているのもガーランドだ。トンプソンもＢＡＲもいいとは思うがやっぱりガーランドが一番だ。

「それでは皆さん席についてください」学年主任の高橋先生だ。学校内では高橋女史と呼ばれてたりする。

「こうなったら拓馬は誰の言うことも聞かないから席に戻ろうか」
「そうね」
「うむ、そうじゃな。こやつがこうなったら何も聞かぬし、席に戻ろうかの」

「それでは廊下側から自己紹介をして下さい」

第二問（後書き）

ちょっと切り方が悪いが気にしたら負けだと思っている。

わからない所はググってください。

この物語を読んでいる皆様にお願いです。

うp主は皆様の意見をものすごく待っています。「こうした方がいい」だとか、「この小説はマジないな」とか、そういう意見でもいいです。とにかく、積極的に感想や意見を言ってもらえるとありがたいです。

あと、アンケートをとりたいと思います。秀吉とくっ付けるオリキャラを考えているのですが、性格が決まってません。次の三つの内のどれがいいかを感想にてお答えしてもらうと幸いです。

1、ツンデレ

2、天真爛漫的な（具体的に言うと超電磁砲の佐天みたいな）

3、ロリキャラ

第四問

「…くま、拓馬！」「あっ、悪い明久、夢中になりすぎた」「まったく、拓馬の番だよ」はぁ、俺の番か。俺的にはこの四人と過ごすだけでいいから自己紹介は必要ないと思うがなぁ。「石井拓馬だ。そこの明久と優子と秀吉は俺の幼馴染だ。以上」そう言って座ると周りから妬みの視線が俺に突き刺さる。はっきり言ってこれはちょっとムカつく。「ああそうだ。明久、優子、秀吉に手を出す奴は…」そういってさっきの銃を取り出し、「潰すから（ニコッ）」これで手を出す奴は居ないだろう。ふん、計画通り（キリッ）　さて、せっかくこっちに意識を戻したんだし、他の奴の自己紹介でも聞くか。って、次秀吉じゃん。て言うか、みんな俺の近くじゃん。ふむふむ、秀吉が俺の後ろで明久が俺の前でその横が優子と。って優子は何でわざわざ明久の隣にしたんだ？ああそうか、優子は明久の事が好きなのか。今度聞いてみよう。「わしは木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。特技は…」「声帯模写だ」わかってはいるが、秀吉の声帯模写似すぎだろ。鉄人の声とか。「ちなみにわしは男じゃから間違えるでないぞ」秀吉って中性的な顔立ちしてるから姉の優子よりも告白が多いんだよな。主に男から。てか、あいつ女子から告られた事あるのか？まあ、その内あるだろう。多分…。ま、もう聞きたい奴もいないし、続きをするか。———そんな事をしてる内にお昼になっちまった。いやー時間たつの速えーな。さて、アイツらと昼飯でも食うかな。て、思えば近くにメンツが全員そろってるっていうね。まったく便利な物だ。「明久に秀吉、それに優子にそこの…」「工藤だよ。工藤愛子。そういう君は…確か石井君だったね」「ああ、そうだ。お前も一緒に飯食うか？」「えっ、いいの？」「ああ、いいさ。お前等もいいよな？」「ええ、いいわよ」「うん、拓馬がいいなら僕もいいよ」「そうじゃな、人数は多い方がいいからのう」「だそうだ。工藤、一緒に飯食うか？」「うん。なら、そうさせて

もらうね（ニコッ）」か、可愛い…「拓馬、ニヤけてるわよ」ハッ、俺としたことが、なんという失態。「それにしても、石井君「拓馬でいい」拓馬君優子にもてもてだね」「別にそんな事言われても別に動じたりはしないぞ」「なんで？」「だって優子に中学生の時告ったら「アタシ好きな人がいるから無理」って断られたから。ま、誰かはだいたい判ったがな。それより、飯喰おうぜ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1588z/

バカと軍事オタクと召喚獣

2011年12月7日23時56分発行